ぼいす

北区飛鳥山博物館だより
2009.3.20
22

平成21年　春期企画展

アスカヤマ・遊山弁当箱プロジェクト
伝えたい日本の美

障子仕立螺鈿蒔絵弁当
金子皓彦 氏 所蔵

会期 3/22(日)～5/10(日)

会場 特別展示室・ホワイエ・講堂

開館時間 午前10時～午後5時

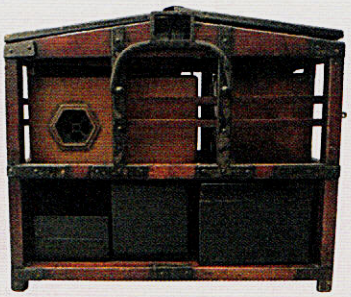
休館日 毎週月曜・
3月24日(火)・5月7日(火)

観覧無料

弁当箱は外出先で食事をとるために使う携帯用の容器です。

なかでも江戸から明治時代にかけて作られた行楽用の弁当箱には、用途に応じてさまざまな工夫やみごとな技巧が凝らされたものがあります。

本企画展は華麗な提重(さげじゅう)や豪華な重箱・行器(ほかい)・茶弁当のほかに、桜の意匠をかたどった器物など、約100点の資料を列品し、名所を彩った食文化の魅力をご紹介いたします。



茶弁当　瀬戸 昇 氏 所蔵

アスカヤマ・遊山弁当箱プロジェクト　伝えたい日本の美

会期 3/22㊐～5/10㊐　観覧無料

このたび行楽の弁当箱・寄木細工の収集家である、金子皓彦（かねこ　てるひこ）氏・瀬戸　昇（せと　のぼる）氏ご所蔵の資料の中から特に優品を選び、また坂崎幸之助氏ご所蔵の桜の意匠をほどこした楽しい資料もまじえた展示を開催いたします。

展示には江戸時代の王子の料理屋に関わる浮世絵も一堂に列品されます。どうぞご来館ください。

寄木細工碁盤弁当　金子皓彦 氏 所蔵

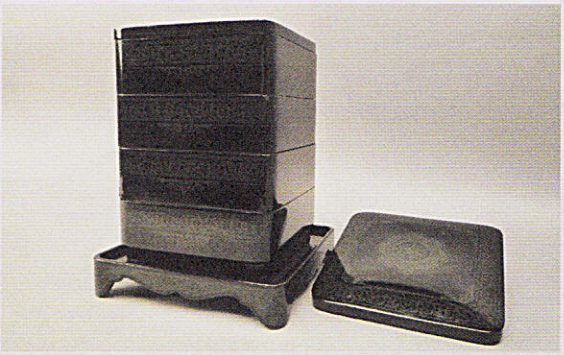
【関連イベント】

資料所蔵者によるギャラリー・トーク

■第1回「寄木細工の美と弁当箱の魅力」
日時：3月22日（日）午後1時30分～2時30分
講師：金子皓彦 氏・瀬戸　昇 氏

■第2回「寄木細工の美と弁当箱の魅力」
日時：5月10日（日）午後1時30分～2時30分
講師：金子皓彦 氏・瀬戸　昇 氏

定　　員：各回とも30名。
会　　場：特別展示室
参加方法：各回とも当日午後12時より、当館入口で先着順に整理券を配布します。
参 加 費：無料
内　　容：会場で所蔵者が展示資料を解説します。



四段重箱　瀬戸 昇 氏 所蔵

桜模様醤油注　坂崎幸之助 氏 所蔵

ミニ・コラム

花見弁当　下の部（複製）

常設展示のなかでも、ひときわ人気が高い「花見弁当（複製）」。ここでは弁当箱ではなく中身を見ていただきたいのですが、当館の花見弁当は享和元年（1801）に版行された料理本『料理早指南（はやしなん）』から「花見の重詰」の「上の部」と「下の部」を再現したものです。

ともに見慣れない料理がいっぱい詰められており、たとえば「上の部」にある「わたかまぼこ」は魚のすり身に漉（こ）した鮑（あわび）の青ワタを混ぜて作ったかまぼこ。「下の部」の「玉づさ牛蒡（ごぼう）」は薄くそいで細切りにした牛蒡の皮を玉梓（たまづさ）（手紙）のように結んで味をつけたもの、といった具合です。同書には詰め方や色取りの注意に加え、行楽の弁当は数を多めに詰めて終日もつようにするのが肝心、との親切な添え書きもみられます。

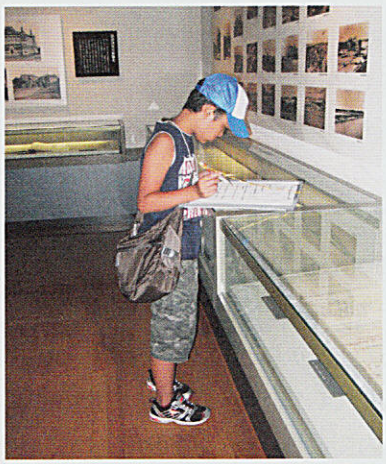
こうなると気になるのは、まだ再現していない「中の部」です。「むきぐるみ」「さんしょもち」…どんな彩りを見せてくれるのか、料理本を前に思わずお腹が鳴りそう（?）。（K）

イベントレポート

10周年の催し物をふりかえって

2008年3月27日、紙の博物館、渋沢史料館、そして北区飛鳥山博物館の“飛鳥山3つの博物館”は、おかげさまで10周年を迎えました。ということで、2008年は10周年イヤーとして3館の合同企画によるたくさんの催し物を行いました。その中のいくつかをご紹介しましょう。

まずは「3館まとめてミュージアムトーク」です。これは3館の常設展示室を学芸員の解説付きで巡るツアーです。各館30分という凝縮された解説だったので解説者も力が入り、聞いていらっしゃる方もちょっと疲れ気味？でも最後には満足いただけたようです。



真剣にクイズを解く子ども（クイズラリーより）

次はなんといっても子供向け夏休み企画「3館まとめてクイズラリー」でしょう。クイズラリーは当館で毎年夏に行っていますが、2008年は10周年バージョンとして、3つの博物館を舞台に開催しました。各館の常設展示室のクイズを解くだけでなく、ボーナスクイズと称して歌を歌ってもらったり、○×クイズでの逆転劇ありで、大いに盛り上がりました。上位3チームには3館のミュージアムグッズ詰め合わせを贈呈。「楽しかった！」の声に一同一安心でした。

壇上より熱の入ったお話！（記念講演会より）

大きなタペストリーがお出迎え（秋期企画展より）

学芸員の解説に聞き入ってます！（秋期企画展より）

大人向けの大きなイベントとしては北とぴあのつつじホールで「開館10周年記念講演会」を開きました。「王子・飛鳥山ー『江戸名所』から『新東京名所』へー」と題して、各館の講師からの熱の入ったお話がありました。アンケートでは「それぞれの館のカラーが出ていてとてもよかったです」との声も。3人の講師の方、お疲れ様でした。

また、秋には当館の企画展として「名所を愉しむための7つのレッスンー江戸名所図会の世界展」を開催しました。『江戸名所図会』を中心に江戸の都市に息づく生活文化の姿を7つの切り口から紹介。江戸ファンのみならず、多くの方々にご来場いただき、おかげさまで8,000人を越える観覧者数でした。ありがとうございました。

10周年は昨年で終わりましたが、これからも飛鳥山3つの博物館合同企画の催し物を開催していきたいと思っております。ぜひまた、ご参加ください。（直）

資料紹介

浅鉢形土器

真横から見ると、ウサギの顔のような、なんとも愛らしい形をしていますが、これもれっきとした縄文土器です。北区七社神社前遺跡の縄文時代前期の素掘りの穴から出土しました。浅鉢形土器の一種で、全体に赤色顔料が塗られており、その大きさは最大径約31㎝、最大高約25㎝を測ります。

ウサギでいえば、“耳”にあたる部分の表面では、土器が焼きあがった後に、赤色顔料で口縁部を縁取り、蕨手文（わらびでもん）などを描いています。また“耳の付け根”にあたる部分では、縁を内側に折り返し、その上に棒状の飾りつけを2条ずつ取り付けたり、表面に渦巻き文やボタン状の飾り付けを貼り付けたりしています。でもこれらの装飾の数々、施す位置に全体での統一性はないようです。顔を近づけて、よ～く観察してみると、装飾性の高さとともに、現代人にはない、縄文人の感性の豊かさにも驚かされます。

本来、縄文土器は煮炊きなどに使用されるものです。

浅鉢形土器

赤色に塗られたカラダ！奇抜なデザイン!! このような一風変わった土器は、いったい何のために作られたのでしょうか…。

それを解き明かす鍵は、どうやら、この土器が“お墓から見つかった”ということにありそうです…。みなさんも一緒に、この土器の謎を探ることで、縄文人の心の中を覗いてみませんか。（O）

ぼいす …… 博物館のDNAについて

師走の押し迫ったある日の午後、3階の閲覧コーナーから電話があり、小学生が王子貝層について教えてほしいとのことでした。行ってみると、二人の男の子が一生懸命本を調べています。聞けば、板橋区の公立小学校の6年生で、どうも学校から出された宿題ではなく、個人的に勉強しているとのことでした。君たち王子貝層ってどういう化石か知ってる？ 海成層ですね。Ohグッド！ 今から12，3万年前の温暖期に海進があった際に生息していたのさ。つまり更新世後期の下末吉期の貝化石ですね？ Ohワンダフル！ どこか採集できる場所はありませんか？ うーんそれが難しい。台地では地表から20m近く掘り下げないと包含層は露出しないしね。成田層（≒東京層）ですね？ Ohエクセレント！ うちの博物館に展示してある標本は清水坂という場所に公共施設を造る際の基礎工事現場から採集したもので、高圧の放水銃を使って地層を崩しながら取り出したのさ。王子貝層ではどういう貝が採集できるんですか？ 代表的なのは絶滅種のトウキョウホタテかな。パティノペクテントウキョウエンシス（*Patinopeccten tokyoensis*）ですね？ Ohビューティフル！ その後は言わずもがな。時間が許す限り化石談義をしてお別れしたのでした。何とまあ大人顔負けの教養を備えた小学生がいるものです。こうした話を館内でしたのは全く久しぶりで、私はその時確信しました。我々が企図するしないに関わらず、ムラタセイサク君ならぬハクブツカンタ君は確実に世の中に育っている。我々はそういう人のために何かしらお手伝いができれば良いのだと。この少年たちが再び来館しないかなと思っている今日この頃です。（守）

大地・水・人

貝塚から知る縄文人の気持ち

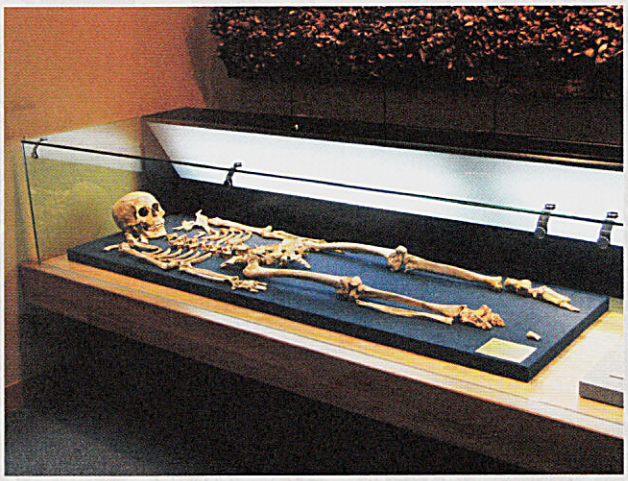
鈴木直人（当館学芸員）

縄文時代を象徴する遺跡のひとつとして貝塚が挙げられます。貝塚というとみなさんはどんなイメージをお持ちでしょうか。そもそも貝塚とは何なのでしょう。貝塚は「塚」とありますが、古墳のように大きく盛り上がっているものではなく、地面の下に貝が層をなして堆積しているものがほとんどです。貝層を観察すると生息域が異なる貝が混在していることから、これらは人為的に捨てられたものだということがわかります。つまり、層を成す貝は縄文人が食した後の貝殻を捨てたものだと考えられます。貝層の中からは他に、シカやイノシシなどの獣の骨や、クロダイやスズキなどの魚類の骨やうろこまでも出土します。こうした骨はばらばらの状態で出土しますので、やはり縄文人が食べた後に捨てたものと考えられます。さらに、壊れた土器や石器などが出土します。これらは完形品ではないことから、使えなくなった道具だといえます。このようにみてみると、貝塚は現代人の感覚でいえば「ゴミ捨て場」という言葉があてはまるのでしょう。しかし、貝塚からは「ゴミ捨て場」にはふさわしくないものも出土しています。それは人骨です。なぜ貝塚から人骨が出土するのでしょう。はたして、貝塚は単なる「ゴミ捨て場」といえるのでしょうか。

平成14年9月、北区西ヶ原三丁目一帯にある西ヶ原貝塚で、発掘調査が行われました。その結果、ヤマトシジミやハマグリ、カキなどで構成される貝層が検出されました。そして、その貝層の下から9軒の住居址と、人を埋葬した4基の墓壙（ぼこう）が発見されました。墓壙には良好な状態で人骨が残っていました。この西ヶ原貝塚の例だけでなく、各地の貝塚で貝層の下や貝層中から人骨が発見されています。しかも、それは明らかに埋葬された状態でのことです。丁寧に埋葬しているということは、人の死に対して畏敬の念があったことは確かでしょう。そう考えると、貝塚に捨てられた他のものに対する縄文人の気持ちをもう一度考えてみる必要があります。

貝塚を形成する貝やそこから出土する獣や魚の骨、壊れた土器や石器に共通するものは何でしょう。それは全て「終えた」ものだということです。食べ終えた貝殻や骨、使い終わった道具類が集められているのです。そして、西ヶ原貝塚の例もそうでしたが、貝層は住居址の上に形成されています。つまり、使用を終えた家の上が選ばれているのです。このように考えると、命を全うした（終えた）人を葬るのと同じ気持ちをもって、使命を終えたさまざまなものを集めたのではないでしょうか。貝塚は縄文人が感謝の気持ちと再び自分たちの暮らしに恵みがもたらされるようにとの祈りをもって、使命を終えたものたちを「送る場」だったのではないでしょうか。

縄文人は人の死とモノの使命の終わりというものを同じように考えていたようです。私たちの暮らしにはたくさんのモノがあふれています。そしてたくさんの人と係わりあいながら生活しています。人や様々なモノに対する感謝の気持ちの大切さを、貝塚は教えてくれているように思います。



西ヶ原貝塚から出土した縄文人骨（当館常設展示室）

歩く・見る・聞く～路地の湧水

「都会」と「湧水」…ミスマッチなように思えますが、区内を歩いていると、ふとした場所で湧水と出会うことがあります。

東十条駅南口を出て急な地蔵坂を下り、線路際を少し行くと、とあるマンションの脇に背後の崖から湧き出た水がジョボジョボと流れ出ています。昔は飲んでいたと言う方もいますが、今はただ排水溝に水を落とし続けています。

東京の湧水は台地や丘陵地・山地にみられ、崖線あるいは谷地に湧出します。北区は武蔵野台地と東京低地の境目にあたるため、現在も10箇所以上の湧水ポイントがあります。崖線沿いの田端駅や上中里駅の構内にも湧水が確認できますし、飛鳥山公園の崖際にもみられます。石神井川沿いでは音無さくら緑地・こぶし緑地など、また谷地では赤羽自然観察公園の池が代表的です。

近年、湧水は東京各地で数を減らしており、北区でも平成2年には16箇所でしたが、平成15年には13箇所と減少傾向にあります。その原因として、地表面が建物や舗装で覆われて雨水が地面に浸透しなくなったこと、また造成や建設により湧水ポイントそのものが失われていることが挙げられます。

湧水は池・川の水源であり、また昔から飲用水・農業用水・生活用水として、人々の暮らしのなかで大いに利用されてきました。すでに数え切れないほどの湧水が消えていった今、都会の片隅で湧き出る水に出会うと「大切にしたい」という気持ちがふつふつと湧いてきます。（K）

ひっそりと流れ落ちる水

写真で見るあの日、あの時

東覚寺
昭和28年（1953）11月28日

被写体として何かこう収まりの悪い印象を受けるのですが、確かに田端二丁目7番にある東覚寺（真言宗豊山派）の写真です。東覚寺は正月の風物詩、谷中七福神巡りの1つ福禄寿が祀られていることで有名ですね。手前の両脇に鎮座しているのはいわゆる赤紙仁王像一対（仁王像は神仏分離がなされる前までは隣接の田端八幡神社の参道脇にあったようです）。

離れた左奥には不動堂（九品仏堂）が写っています。最近まで仁王像と不動堂は近接した地点に建てられていましたので、違和感があるのはそのためかもしれません。元々不動堂は仁王像の背後に建てられていたのですが、大東亜戦争の際、左奥にあった本堂ともども焼失してしまいました。敗戦後まもなく旧本堂の焼け跡に戦前までの不動堂と同じ様式の建物を再建していたのです。実は中央に黒っぽく写っている部分は元の不動堂が建てられていた敷地でした。本写真が撮られたのはまさにこの時期です。こうしたトリッキーな境内の配置は昭和42年（1967）本堂が再建されるまで続き、仮本堂にしていた不動堂が旧位置に戻されてからはごく最近まで見られた配置になりました。

さて、昨年から門前を通る都道補助92号線の拡幅工事が進められ、仁王像は7mほど奥に動かされ、不動堂は新規に建て直されることになりました。嗚呼！古くからのお寺といえども、その佇まいが常にその場所で維持されているわけではないということをこの写真は的確に伝えています。（守）

故 手川文夫氏 撮影

常設展示 ～もっと知りたい！ちょっと気になるこの一品～

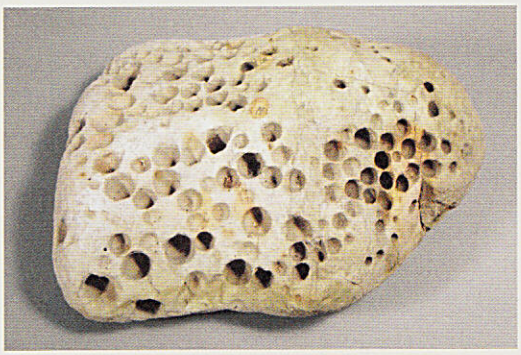
「房州石」

「なぜこんな所にこんなものが!?」と、この石を目にされた方の多くがそのような印象をお持ちになるのではないでしょうか？

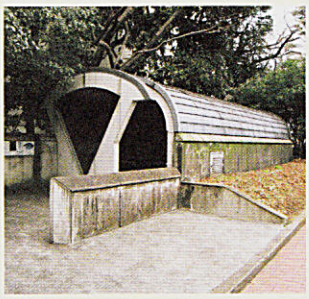
この石は、その名を“房州石”といい、当館常設展示『豪族の眠る丘』コーナーで展示しています。この無数の穴は、穿孔性二枚貝による住み跡です。ものによっては、二枚貝が埋まったままになっているものもあり、ひとつの型に収まらないところが、この石の面白いところです。

房州石は、千葉県南西部の海岸付近で多く見られます。“砂質凝灰岩”という種類で、非常に脆く、石室には不向きな石材ですが、北区内では赤羽台第3・4号墳石室に使用されていました。遠隔地にあり、かつ海とつながりの深い石材で、石室を造り上げる意図はどこにあったのでしょうか。

現在、常設展示室にある房州石は、参考資料として、千葉県富津市の鋸山（のこぎり）周辺から採取してきたものです。本家本元をご覧になりたい方は、北区中央公園まで足をのばし、赤羽台4丁目から移設された「赤羽台第3号墳石室」を見学してみてはいかがでしょうか。（O）



房州石



赤羽台第3号墳石室

博物館インフォメーション

ミュージアム・グッズに「新作登場」

当館のミュージアム・グッズに新しい仲間が加わりました！

イチ押しは、オリジナル・キャラクターのコン吉をアレンジした「ミュージアムバッグ」。講座のお供はもちろん、毎日のサブ・バッグとしても使えるA4サイズで登場です。素材は丈夫なキャンバス地、桜色と茶色の2色から選べます。それぞれ、かわいいチャーム・ストラップが付いて頒布価格は450円です。

また、昨秋お目見えした「オリジナル・クリアファイル」2種も好評です。「コン吉」のイラストが楽しい透明タイプが200円、勝川春潮画「飛鳥山花見」の浮世絵が美しい白色タイプが220円です。

当館のミュージアム・グッズは、全て当館スタッフがデザインした正真正銘のオリジナルです。どちらも数量に限りがありますので、売切れ御免！ 来館の記念に、お土産に、ぜひお求めください。

北区の「観光切手」「観光絵はがき」もよろしく

北区産業振興課が作成した新しい「観光切手」には、当館所蔵の浮世絵がずらり！ 美しい50円切手が10種10枚ならんだ華やかなシートです。また、「観光絵はがき」として、飛鳥山公園はじめ区内の名所を写した美しい写真絵はがきが10種類揃いました。切手シートは1枚900円、絵はがきは1枚50円で、当館でもお求めいただけます。

北区の昔を伝えるモノや写真を探しています！

当館では、北区内で使われていた生活用具や古い写真など、昔の暮らしぶりがわかる様々な資料を探しています。

心当たりのある方は、ぜひ当館（03-3916-1133）までご連絡ください。

かえりみる十歳の道の人と顔

学芸員リレーエッセイ

博物館いろは歌留多

平成10年春、強い春風が吹くなか、飛鳥山3つの博物館は開館しました。それから10年余り…あらためて振り返ってみると、（成果はどうあれ）全力で走り続けた年月だったと実感します。思えば10年前、博物館にはすでに厳しい逆風が吹いていたため、スタッフの危機感や気負いは当初から大きいものでした。一方で、その気負いが新しい事業を次々と実現していくエネルギーにもなったように思います。

そしてまた、大きな不況の波のなかで新たな10年が始まりました。博物館がいかに声高に歴史・文化を守り伝えようと叫んでも、空しくかき消されていくように感じる日々です。ともすれば萎れがちな心の支えとなるのは、やはり博物館で出会う「人」です。大切な思い出の品を寄贈してくれる方、何度も講座に足を運んでくれる方、展示を見て喜んでくれる方などなど、いつも有り難い思いでいっぱいになります。また、お客様だけではなく、展示製作や資料運搬、印刷物作成など、数多くの場面で「良いものを作ろう」という意気を共有してくれる人たちに出会い、大いに力づけられています。

博物館には、モノを介して人の生きた証を残し、次代に伝える役目があります。だからこそ人を大事にしたいと考えます。当館のスタッフも年齢とともに体力（知力？）の衰えは隠しようもありませんが、現実から目をそらさず、そして「ありがとう」の気持ちを胸に、少しでも前進していきたいと思っています。（K）

利用のご案内

【開館時間】

午前10時～午後5時

※観覧券の発行は午後4時30分まで

【休館日】

●毎週月曜日

（国民の祝日・休日にあたる場合は開館し、直後の平日に振替休館）

●年末年始（12月28日～1月4日）

※このほかに臨時休館日があります。

・JR京浜東北線　王子駅南口より徒歩5分
・地下鉄南北線　西ヶ原駅より徒歩7分
・都電荒川線　飛鳥山停留所より徒歩4分
・都バス　草64、王40系統　飛鳥山停留所より徒歩5分
・北区コミュニティバス　飛鳥山停留所より徒歩3分

【常設展観覧料】

	個人	団体	三館共通券
一般	300円	240円	720円
小・中・高	100円	80円	240円

・小学生未満は無料
・団体扱いは20名以上
・三館共通券は当館のほか、渋沢史料館、紙の博物館をご覧になれます。

編集後記

開館10周年イヤーの昨年は、紙の博物館・渋沢史料館との合同イベントなど、たくさんの催し物をおこないました。少々くたびれて迎えた年明けでしたが、1～2月の小学校対応事業には過去最高の37校が参加！　元気な子どもたちを前に、気を引き締めなおしました。

これからも皆さまとともに20年、30年と年を重ねていけるように、スタッフ一同、今年も大いに汗を流したいと思います。（K）

平成21年度上半期の催し物

春 4月～6月

4月 ●企画展
「アスカヤマ・遊山弁当箱プロジェクト 伝えたい日本の美」（3/22～5/10）
●常設展示ミュージアム・トーク

5月 ●講座「新緑の日光御成道をたどり歴史を訪ねる」
●講座「名所の変遷をたどる Part Ⅱ」
●講座「『絵本江戸みやげ』を読み解く」
●スポット展示
「ASUKAYAMAセレクション5☆2009」（5/23～6/21）

6月 ●スポット展示ミュージアム・トーク
●2009年映像企画「都電わが町」
●講座「再発見！ 時代を映す昔の教科書」
●講座「古代の技術をさぐる－勾玉をつくる－」

夏 7月～9月

7月 ●イベント「夏休みわくわくミュージアム☆2009」（7/20～8/30）
・土器づくり教室
・勾玉づくり教室
・地下鉄／都電車庫見学会
・江戸のおもちゃ〈ずぼんぼ〉を作ろう
・キツネの紙人形を作ろう
・はくぶつかん探検ツアー
など

8月 ●講座「新聞から読む考古学」

9月 ●講座「古代の葬送」
●特別展覧会
「人間国宝奥山峰石と北区の工芸作家展」

※催し物名称は仮称です。
詳しくは館発行の「催し物案内」、北区HPをごらんください。

お知らせ

□ 休館日を変更します

平成21年4月1日より、当館の休館日は年末年始を除き、毎週月曜日のみとなります。ただし、月曜日が国民の祝日・休日の場合は開館し、直後の平日が振替休館となります。

□ 資料消毒にともなう臨時休館

収蔵資料を害虫やカビから守る殺虫・殺菌処理にともない、6月下旬から7月上旬の約5日間を臨時休館日とさせていただく予定です。詳細な日程は北区ニュース、北区公式HP等でお知らせいたします。何卒ご理解のほどお願いいたします。

北区飛鳥山博物館だより
ぼいす22

発　行　平成21年3月20日
編　集　北区飛鳥山博物館
〒114-0002 東京都北区王子1-1-3
TEL. 03-3916-1133
発　行　東京都北区教育委員会
〒114-0002 東京都北区王子本町1-2-1
TEL. 03-3908-1111（代）
印　刷　羽陽美術印刷株式会社

刊行物登録番号 20-2-044